視察用

様式(細則 5-2)

平成 29 年 8 月 28 日

浜田市議会議長
西　田　清　久　様

議員名　　平 石　誠　印

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　　間　　平成 29 年 8 月 22 日（火）～平成 29 年 8 月 24 日（木）

2．視察先および研修テーマ

(1) 場所　　宮崎県日南市　子育て支援センター
　内容　　日南市子育て支援センター「ことこと」の取組について

(2) 場所　　宮崎県高千穂町　高千穂町役場および秋元集落
　内容　　世界農業遺産、伝統芸能の継承の取組について
　　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

3．参加者　　西田清久、飛野弘二、上野茂、串崎利行、平石誠

4．調査経費　　１５８，４９５円／５人＝３１，６９９円
　　内訳　旅費　83,695 円　宿泊費(体験料含む)　74,800 円

浜田市議会 受付 29.8.28

5．調査研究活動の概要

①日南市　子育て支援センター「ことこと」の取組について

平成29年8月22日(火)　15：00～17：00

（内容）

(1)施設整備の背景

・中心市街地活性化事業（平成24年11月から平成28年度末）の一環として整備。

・計画策定段階での市民の意見、要望などは次の通り。

○市民アンケートでは、必要な施設の最多は大型商業施設21.8%、子育て支援施設も14.0%。

○子育て世代のアンケートでは、遊具のある屋根付屋外スペースが第1位17.5%、子育て支援センター13.3%、地域住民も一時預かり機能充実、子育て環境充実を希望。

・東京おもちゃ美術館と「ウッドスタート」共同宣言（平成27年1月）

○市内の3ヶ月児全てに「うごくぞー」（象の形をした木の遊具）を贈呈

○市内小学1年生に「日南キューブ」（飫肥杉製の積み木）を贈呈

○東京おもちゃ美術館の多田館長の日南市での講演、木育ひろばを紹介

(2)施設の概要

・子育て支援センターは民間施設の一部を賃貸で整備。
日南まちづくり株式会社が所有する「Ittenほりかわビル」にテナントとし入居。

・「ことこと」の整備費および運営費

○整備年度　平成27年度（設計）、28年度（工事）

○経　費　160,070千円

設計、管理費　18,201千円

工事費　141,869千円

○財源内訳　国の交付金　71,200千円（社会資本整備総合交付金）

起債　79,900千円（児童福祉施設整備事業債）

一般財財源　8,970千円

○運営費　17,213千円（平成29年度当初予算ベース）

・施設面積、駐車台数

○施設面積　564.30㎡（171坪）

○駐車台数　一般利用者スペース約60台（立体駐車場）

・家賃等

○家　賃　1,080,000円(税込)/月

○共益費　184,700円(税込)/月（ことこと1ヶ所分）

○駐車場　立体駐車場利用者2時間まで無料の発券1枚につき10円を負担。＊立体駐車場運営に対する補助金100万円/年を市が負担。

・施設の特徴

○当初は、子どもに人気のあるキャラクターを活かしたミニ遊園地を想定

○東京おもちゃ美術館長講演、飫肥杉産地、ウッドスタート宣言によりも木育を特化

○購入したおもちゃ以外は、内装材を含め全て飫肥杉
○設計、管理は東京おもちゃ美術館の木育ひろばを設計した㈱パワープレイス（東京）
○スギコダマなどの製作に市民がボランティアで協力
○木育ひろばとしての規模は日本一
○工事はすべて市内業者、おもちゃの購入先はすべてグッドトイ委員会

(3)職員体制

・正規、嘱託職員、資格者
○正規保育士　4名（所長1名、主任保育士2名、保育士1名）
○嘱託保育士　2名
○嘱託看護士　1名
○嘱託子育て支援員　1名
○再任用保育士　1名
＊職員の代休、振休等もあり常時7～8人で対応。勤務は時差出勤のシフト制をとっている。

(4)施設の機能

・遊び場と交流の場の提供
・一時預かりの実施
開設日9時～21時まで対応。有料：500円/2hその後30分ごとに150円追加
・○子育て等に関する相談、援助　○情報提供、講座の開催
○木育サポーターの養成
・観光施設、集客施設、地域の子育て拠点施設

(5)利用状況

平成28年まで市内2ヶ所にあった子育て支援センターの合計利用実績
○平成27年度　12,855人　○平成28年度　10,791人
「ことこと」運用開始平成29年4月8日～7月31日までの利用実績
＊＊14,430人＊＊
施設の噂等で市内外、県外からの利用も増加しているとのこと。

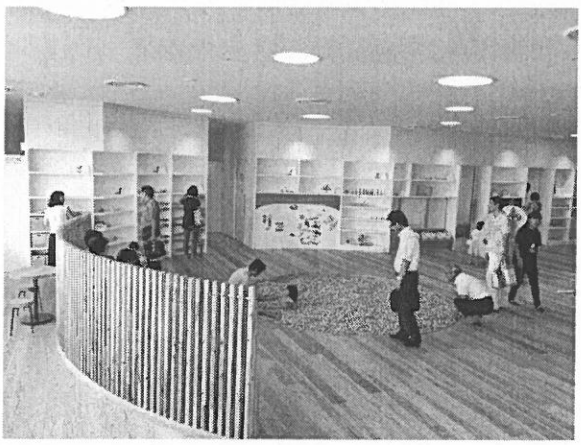
(6)利用者の評価

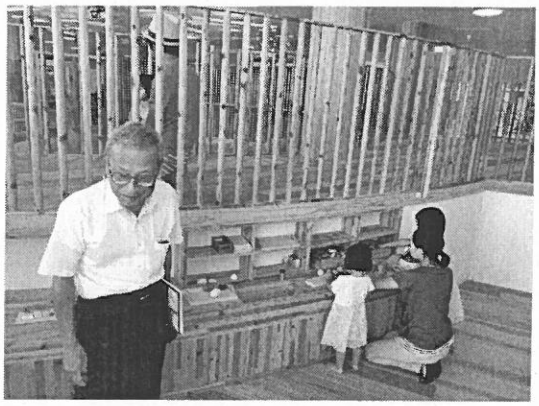
・家ではぐずっていいても、「ことこと」にくると泣き止んで遊ぶ。
・「ことことに行くよ」というと、すぐに準備するようになった。
・幼稚園より「ことこと」が好き。
（幼稚園に行かないと「ことこと」には行けないと言うと、素直に行くようになった。）
・知り合いが少ない利用者に対する職員からの情報提供、同世代との出会いの機会はありがたい。

（感想）

浜田市では既存の子育て支援センター「すくすく」の老朽化に伴い、建替えが予定されている。移転新築なのか、現地立替なのか、はたまた既存施設の改装等様々

な考えがあると思う。先日、執行部から、あくまでも「案」ということで、浜田市総合福祉センターと世界こども美術館に挟まれた市有地に建設すると報告があった。これに対して、利用者や関係者等から様々な意見を頂戴しているところであり、今回の「ことこと」を訪問させていただいたことは意義深いものであった。商店街の中心施設に子どもに関する施設を配置することによる、商店街の活性化、経済波及効果、さらには、日南市産の飫肥杉を活用した木育の推進等、浜田市の課題解決に繋がる糸口になるのではないかと思う。この取組についてはYOUTUBEでも配信されているので、子育て支援センター整備の関係者にはぜひ視聴していただきたい。





②高千穂町　伝統文化の継承について

平成29年8月23日（水）13：30～17：00

（内容）

高千穂町は天孫降臨の地としての誇りをもち、氏神様や山の神・水源神をはじめ、野山のいたるところに祀られている神仏への祈りを糧に、山の峡に拓かれた狭い田や細長い畑を有効に活かしながら、農村景観の保全を図るとともに、夜神楽をはじめとする高千穂特有の生活文化を大切に受け継いでいる。そうしたこと

楽をはじめとする高千穂特有の生活文化を大切に受け継いでいる。そうしたことから、平成27年12月15日「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」が世界農業遺産に認定された。認定内容として、本地域は山腹用水と棚田、木材生産、椎茸栽培、茶、肉用牛、焼畑という伝統的な農林業と村落共同体を維持する伝統文化「夜神楽」がその要旨である。

世界農業遺産認定の目玉として「神楽」が重要視されており、認定区域内の5町村に87の神楽保存会が存在しているとのこと。そのうち、高千穂町内では30の保存会があり、関係者（奉仕者）は462名で高千穂町内の男性人口の7.6%相当する。（視察当日の説明員で出席の担当者も神楽関係者とのこと）

平成28年度の夜神楽公演の実績は、平成28年11月12日～平成29年2月11日までの19公演開催されている。公演場所は町内の公民館が主で、中には個人宅での公演も実施されており、当市との違いが感じられた。

本年8月には、町内30の保存会などが参加して、「夜神楽伝承協議会」が発足し、これまでなかった神楽のネットワーク組織が誕生した。この協議会には、神楽保存会のほか、神社の宮司や氏子総代、町公民館連絡協議会の代表、学識経験者が含まれている。今後、神楽の伝承者育成や、イベントへの派遣事業などを進めるとともに、昨年11月に九州5県の10神楽団体で発足した「九州の神楽ネットワーク協議会」と連携しながらユネスコ無形文化遺産への登録申請を目指すとのこと。

（感想）

まずは、世界農業遺産に登録された決め手の一つが「神楽」ということに驚いたしだいである。確かに、神楽は五穀豊穣の祈り、実りの感謝の意をこめられたものがあるという点では農業とつながりがあるので納得した。

浜田市では一年間を通して「週末夜神楽」を毎週土曜日実施しているが、観光面での位置づけであり、高千穂町の取組との違いを感じた。高千穂町も神楽を観光面で大いに役立ててはいるが、国指定重要無形文化財「高千穂の夜神楽」として伝統文化の継承に重きを置いているところは見習うべきであると感じた。

③高千穂町　地域資源を活かした取組について（秋元集落）

平成29年8月24日（木）9：00～11：00

（内容）

秋元集落は、40戸100人集落で、集落のほとんどが斜面のため小さな水田が多く、枚数にして100枚以上である。そういった地域で、耕作放棄地の拡大にストップをかけたのが、今回訪問した、民宿「まろうど」である。社長の飯干淳志氏が町役場職員時代から思い描いていた、地域活性化策の成功事例として研修させていただいた。

「株式会社高千穂ムラたび」が正式名称で、前述の民宿と「飲む点滴」としＴＶで最近話題の甘酒を造っている「まろうど酒造」があるのは、高千穂町の中心から南東へ車で40分ほど走った山深い集落だった。そこでは、主の奥様が民宿を切り盛りし、酒造では10数人の従業員が月5万本もの売上げを誇る甘酒のお化けブランド「ちほまろ」の製造に追われていた。驚いたことに、その10数人の従業員の年代は20、30代が中心であり、集落内外から通勤しているとのことであった。視察当日の朝も製造や出荷作業でてんてこまいの様子だった。

ここで製造されている甘酒「ちほまろ」は米こうじの甘酒に日と手間かけ、植物性乳酸菌で発酵。優しい甘酸っぱさとすっきりとした味わい。無添加だが常温保存で8ヶ月もつとのこと。折からの甘酒ブームに乗って、美容・健康志向の消費者の心をつかみ、前述の5万本/月の出荷本数を誇っている。販売から3年弱で売上げは年間1億円に迫るとのこと。原料の米は、集落内の棚田で栽培した「ヒノヒカリ」を農家から買い取っており、買い取り価格は農協価格の+2,000円。契約面積は3ヘクタール、100枚以上の棚田からなる。手の施しようの無かった耕作放棄地を見事に解消し、農家所得の向上に繋げられたことには、驚きの連続だった。社長いわく、受注数が日々増加しており、米が不足し、集落外へも手を伸ばしたいが、いろいろと障害があり苦労しているとのことであった。

（感想）

まず一番に驚いたのが、道路の細さだった。山育ちで狭い道の運転には慣れていたが、見通しが利かない、待避所が少ない等で10数ｋｍを40分もかかってしまった。そんな場所に民宿・酒造会社が？というのが第一印象であった。険しい山道のカーブを曲がるといきなり古民家を改装した民宿が現れた。駐車場と書かれた看板横のこれまた狭い砂利道の坂を上ると若者が数人車に乗り込むところだった。その時は詳しい話を聞く前であったため、その若者たちが「ムラたび」を支える従業員とはわからなかった。

車を止め、民宿の部屋に案内されると、周りの景色に似つかわしくない小洒落た造りでどこか「ほっと」したようであった。

晩御飯は、社長の奥様が一人で作っていただいたようであり、地元の食材を見

栄え良く、とても美味しく料理されており、ついつい食べ過ぎてしまった。

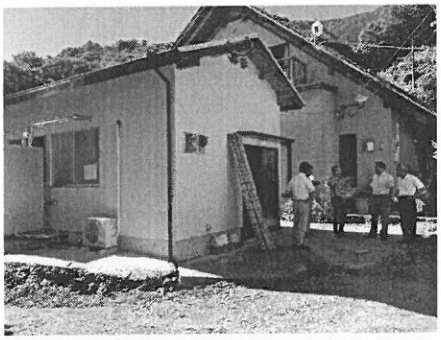
翌朝、社長から酒造の説明をお聞きし、若者たちの働き振りを見学させていただいた。狭いスペースで５万本/月を生産・出荷していることに驚かされるばかりであった。別棟で、社長の娘さんが出荷作業中であったが、全国各地の地名が飛び交っており、取引先の多さが確認できた。

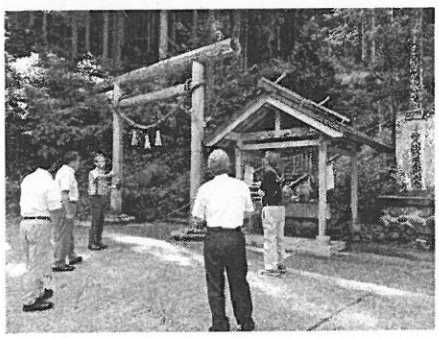
施設見学を一通り終えたところで、社長がどうしても見てもらいたい場所があるとのことで同行した。

民宿「まろうど」から直線距離で１ｋｍ程度だったと思うが、道路でとなると、谷を下り、曲がりくねった坂を上り、民家の軒先と墓地の間の狭い空間を通り抜け、さらに林道らしき道を進んだところに目的地はあった。その目的地というのは、秋元集落の氏神様である秋元神社であった。

秋元神社は、旧高千穂郷諸塚太白山の麓に鎮座する神社で、日本書紀の天神三柱である国常立尊・国挟槌尊・豊斟渟尊が祭祀されており、地元にとても大事にされている神社であるとのことであった。数年前に立替を行った際には、費用の捻出が苦しく、全国に秋元神社の紹介と建替えについてＰＲしたところ多くの費用が集まり、建て替えることができたとのことであった。その関係からか、毎年多くの参拝者が訪れており、遠くは北海道からの参拝者もあり、約３万人/年にもなるとのことであった。集まったお賽銭で、神社の維持ができているとのこと。

社長や秋元集落の人たちが実践している、「地元資源に感謝し、あるものを最大限に有効活用すること」を学んだ二日間であった。





以上報告とします。